

父さんの挑戦

星野良一

「くそーっ、今回も一次で落ちたか」
父さんが肩を落としてそう言ったのは、木曜日の夜のことだった。

父さんの手には、出版社から送られてきた落選通知があった。その出版社では、毎年童話賞の公募をされていて、父さんはそれに挑戦していたのである。

童話賞は、四百字詰め原稿用紙三十枚以内で、大賞を受賞すれば本になり出版されるらしい。父さんは、ぼくが小三のころから三年連続で挑戦しているが、一次選考を通ったこともなかった。

「くやしいなあ、最高傑作だったのに」
ぼくは、通知書をくしゃくしゃに丸める父さんの顔を見た。

「それ、毎年言ってるよね」
「作品はよくても、結局は選者の好みだからなあ」
「それも毎年言ってるよね」

父さんは、ぼくのツッコミを完全に無視すると、
「いやいや、人のせいにしてはいかん。今度こそ大賞だ！
書かねば書かねば、継続は力なりだ！」
と、握り拳を作り、居間から出ていった。

それから、一年後のことだ。

「やった、ついにやったぞ！」

興奮した父さんが、出版社の通知書をぼくに見せる。そこには、童話賞で一次選考は通過したが、二次選考で落選したことが記されていた。

が、そんなことより、ぼくにはずっと気になっていることがあった。

「父さんのペンネーム、《子猫野でべそ》って変だよな」

「名前なんてどうでもいいだろ。大事なのは作品だ。作品が評価されたんだ」

「でも、一次を通っただけでしょ」

「それでも立派な進歩じゃないか」

「そりゃそうだけど」

「よし、次こそは大賞だ！ 書かねば書かねば、継続は力なりだ!!」

父さんはいつになく気合いを入れると、大股で居間を出ていった。

そして、数日後の日曜日の朝。

ぼくが居間に行くと、目の下にクマを作った父さんが原稿を突き出してきた。

「やっとできたぞ、最高傑作だ！」

「また同じこと言ってるの」

「いや、今度こそ本当だ。どうだ、読むか」

「いいよ。いつも読んでないし、童話に興味ないし」

「そう言うなって、読んでみてくれ、な、な、な」

父さんの圧力に押され、ぼくは仕方なく原稿を受け取った。

「どうだ？ カメとブタのキャラも立ってるし、ラストのひねりも面白いだろ」

原稿を読み終わるなり、父さんが前のめりに聞いてくる。

「まあ、いいんじゃないの」

「だろ、だろ、これで大賞間違いなしだ」

ニヤニヤしていた父さんは、そこで急に真顔になると、

「おれには、これ以上のものは絶対に書けん！ だから、挑戦するのはこれが最後だ！」

と、格好よく宣言し、コーヒーを飲んでごぼごぼとむせた。

それから、一年が過ぎた。

居間で座っている父さんの手には、出版社からの通知書があった。

「ど、どうだった？」

恐る恐るぼくが聞くと、父さんが涙声で言った。

「……だめだった。最高傑作だったのに、一次も通らなかつた」

ぼくは、去年の父さんの言葉を思い出した。

「父さん、これが最後の挑戦って言ってたよね」

「ああ、そうだ。男に二言はない。これできっぱりあきらめる。父さんには童話を書く才能がなかつたんだ」

父さんは、くやし涙を指でぬぐうと、とぼとぼと居間を出ていった。

ぼくは父さんのあまりの落ちこみように、複雑な気分で自分の部屋にもどった。

「神様も、意地悪だなあ」

とつぶやき、窓際の本棚を見る。

そこには、ぼくの大好きな長編ミステリー小説がずらりとならんでいた。そして、その背表紙には、ペンネームではない、父さんの名前が誇らしげにあった。

(終わり)